

[環境科学研究科ニュースレター]

NEWS LETTER

No.7
2007.11

GSES

東北大学大学院 環境科学研究科
Graduate School of Environmental Studies
URL: www.kankyo.tohoku.ac.jp

特集

文部科学省・大学院教育改革支援プログラム
「環境フロンティア国際プログラム」が10月からスタート

特色ある教育コース



東北大学

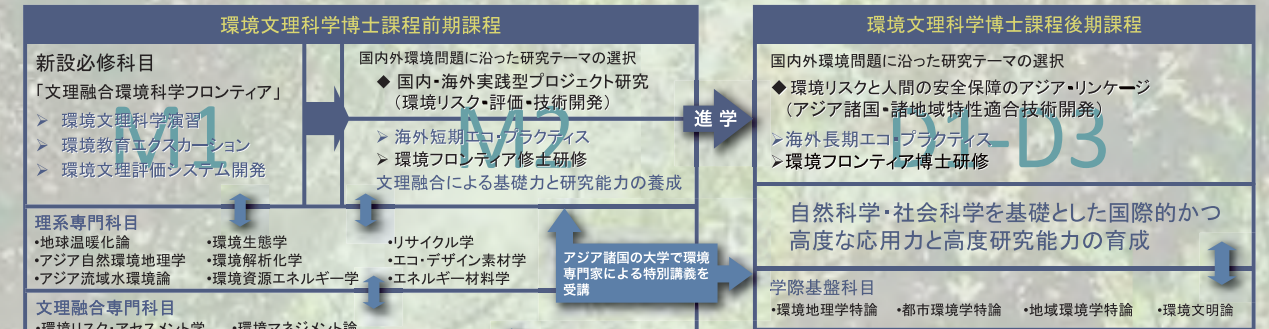
環境フロンティア国際プログラム

文部科学省・大学院教育改革支援プログラム「環境フロンティア国際プログラム」が10月からスタートしました。社会の要請に応えるべく、環境問題に関する国際的かつ俯瞰的な視野をもつ人文社会系の人材を養成します。特に、環境問題の深刻化に拍車をかけているアジア諸国の著しい経済発展および経済システムを理解し制御できる人材の育成は急務です。このため、経済学研究科と連携してプログラムを実施しています。このプログラムの最も特徴的な授業科目は「海外エコ・プラクティス」です。海外の大学等関係機関で1ヶ月以上の研修を行います。

文理の枠にとらわれない発想力、文理を融合した知識と経験、緊急問題に即応し、国際環境経済学、国際環境法、環境影響評価、リスクマネジメント、排出権

取引などの高度な知識を身につけ、将来環境問題の解決に寄与し、実践的な分野で活躍できる人材「環境フロンティア」を養成します。

本教育プログラムの概要



地球環境問題の大勢を決定する「アジアの環境リスク・安全保障」

- 本研究科の高度教育・研究を目指した取組み
- ◆アジア諸国との教育・研究協力協定
 - ◆宮城県との包括協定:環境及びエネルギーに関する連携と協力
 - ◆国内の環境ビジネス企業との包括協定
 - ◆環境の国際会議・フォーラムの開催、プロジェクト実施



特集: 特色ある教育コース

「ヒューマン・セキュリティと環境」コース

1. 「ヒューマン・セキュリティ」コースの開設 (2005年4月)

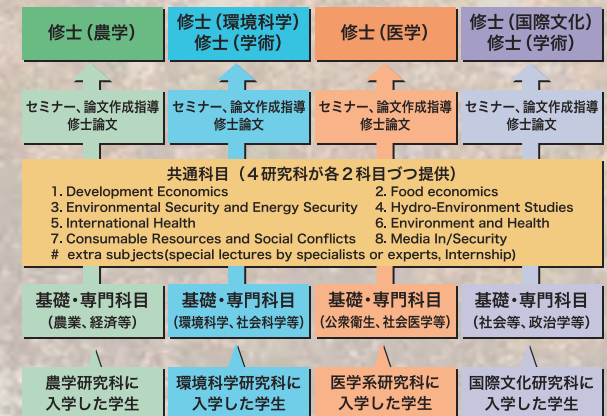
環境科学研究科は、2005年4月から、「ヒューマン・セキュリティと環境」コースをスタートさせました。このコースは、東北大学の専門領域が異なる4つの大学院、農学研究科、医学系研究科、国際文化研究科、環境科学研究科が連携して実施する「ヒューマン・セキュリティ連携国際教育プログラム」事業を構成するプログラムの一つです。この連携国際教育プログラムは、人間諸個人が自由でかつ安全・安心な生活を享受できるような国際社会の構築に知的側面から貢献することを主たる目的とし、国際社会や地域社会のレベルで人間諸個人の安全保障を実現するために政策立案や実社会の分野で活躍できる専門家・リーダーを育成することを目標としています。

このプログラムでは、日本人と外国人、とくにアジアの学生や社会人を対象にしており、そのため授業はすべて英語で実施されています。これまでの延べ入学

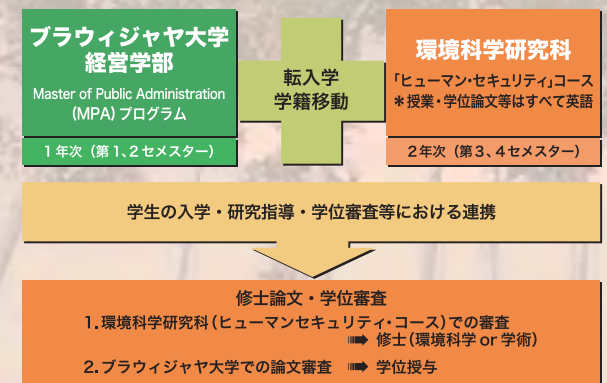


者数と国籍は、2005年修士課程2名(日本1名、ウズベク1名)、2006年修士課程2名(日本1名、コロンビア1名)、2006年博士課程1名(イラン1名)、2007年修士課程1名(スリランカ)と博士課程1名(ウズベクの進学者)で、博士課程前期2年の課程5名(日本2名、ウズベク1名、コロンビア1名、スリランカ1名)、博士課程後期3年の課程2名(イラン1名、ウズベクの進学者1名)の合計7名です。

修士課程 (2年、30単位以上取得)



ブラウィジャヤ大学とのリンクエッジプログラム



2. 「国際共同教育」の段階へ

東北大学の「ヒューマン・セキュリティ連携国際教育プログラム」は、インドネシアで日本からの開発援助によって実施されている「高等人材開発事業」と連携教育を実施することになりました。

農学研究科と環境科学研究科の「ヒューマン・セキュリティ」プログラムは、修士課程のダブル・デグリー・プログラムを2007年10月から開始します。インドネシアからの学生は、両研究科合わせて4名までとし、1年次はインドネシア(ブラウィジャヤ大学の公共政策大学院)で履修し、2年次に環境科学研究科または農学研究科に転入学し、東北大学の規定(両研究科の規程)に従って、しかるべき単位の修得と修士論文の口頭試問に合格したあと、修士の学位を取得することになります。環境科学研究科のプログラムでは修士(環境科学)または修士(学術)が、農学研究科のプログラムでは修士(農学)が授与されます。

高度環境政策・技術マネジメント人材養成プログラム

高度環境政策・技術マネジメント人材養成ユニットは、科学技術振興調整費・新興人材養成プログラムの平成17年度採択課題として平成17年度から5年間、環境科学研究科内に設置される人材養成プログラムです。

この計画で養成する人材は、地球温暖化、資源・エネルギー危機、人口問題などのグローバルな環境問題、また廃棄物リサイクル管理など環境リスク管理と汚染防御に関する正確な知識に加え、「環境政策」、「環境技術」、「環境経営戦略」等の高度な環境マネジメント技術を習得し、これらの知識と実践を、企業の技術開発の将来展開、経営戦略、および地域振興としての自治体の環境政策に活かせる環境政策・技術分野に関する即実践型環境リーダー人材です。

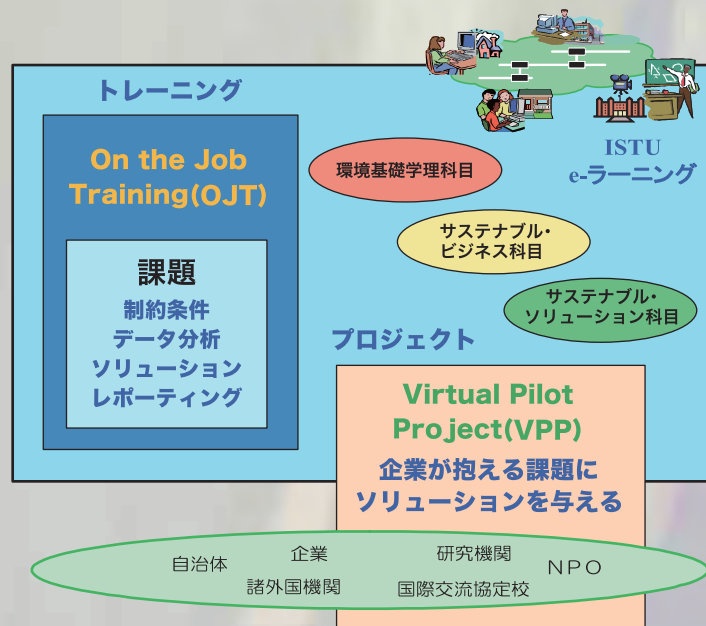
修士課程については平成17年10月より、博士課程については平成18年10月より養成を開始しました。5年目までに修士課程30名、博士課程9名を養成し、NPO、NGO、民間企業、政府機関、国際機関、地方自治体等へ供給することを目標としています。

本カリキュラムは求める人材養成に必要な科目群を原則すべて履修するトップダウン型（人材指向型）であるため、東北大学内の当該分野の専門家不足の講義についてはその分野における第一人者である外部講師を積極的に活用することが必要です。従って、講義は東北大学内外の多数の講師が関わることとなります。現在国内外外部講師39名を含む54名がスクーリングを含め講義を担当しています。

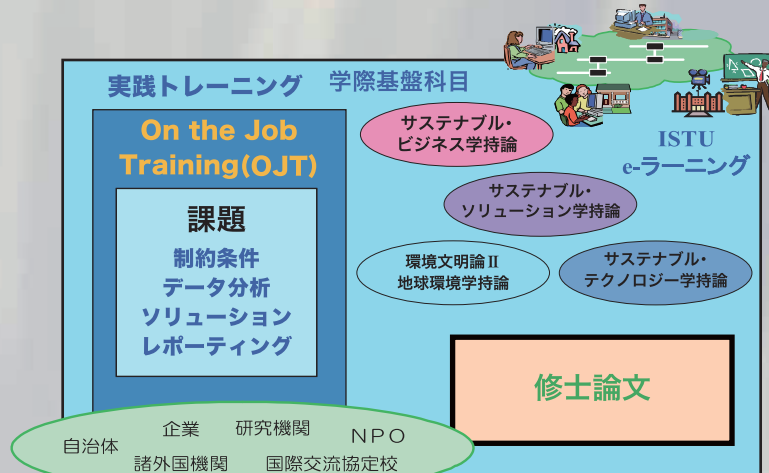


SEMSaT

人材養成ユニットのカリキュラム構成



修士課程



博士課程

2年間の人材養成ユニットを修了して

このたび2年間の学生生活を終え、人材養成ユニットを修了しました。不規則な仕事ゆえに、在学中は先生方や教務の皆様にご面倒をお掛けすることも多々ありましたが、無事修了できましたのは皆様の熱心なご指導の賜物と存じます。心から感謝申し上げます。



マスコミ
アナウンス部
盛 朋子

以前からメディアとして環境問題を扱うことが多かった私は、日進月歩の環境技術や企業の環境経営、NPOの活動などを見ていて、何をどう伝えればよいのか悩むことも多く入学を決意しました。修了した今、完璧ではないものの、その道筋が少しずつ見えてきていると感じています。また、頼もしい同志を得たことで環境問題に立ち向かう勇気もいただきました。お世話になった皆様に、より良い放送でご返しができますように今後も精進してまいります。ありがとうございました。

ユニット学生生活を振り返ると、いろんなことがあった。当初、社会人として日常の会社業務を持ちながら学生として勉強するといったことがどういうことか、あまり真剣に考えていなかった。しかし、カリキュラムが進むにつれてこれは大変なことだと認識を改めるようになった。ただでさえ、会社の業務が切羽詰っている時に、e-Learning、OJTやVPP課題を行うことは、正直大変なことであった。まず、土曜日、日曜日に勉強をするといった習慣ができていない。どうやって勉強する時間を捻出するかを考えるようになり、どうやったら効率良く、学習や調査や思考錯誤ができるかを真剣に考えるようになった。2年間の経験により、より効率的な学習方法や思考方法を見出せたのは最大の収穫である。また、環境問題について自分と同じように悩んだり迷ったりする人たちがたくさんいることを知ったのも、私には大きな収穫であった。



住宅機器
環境戦略部
桑原 賢司

2つの意義あることを収穫でき、無事修了できるのは大きな喜びである。家庭の生活もかなり犠牲になったが、今後は自分が得たことを、自分の子供や未来の子供たちにいろんな形で引き継いでいこうと思う。

この2年間、「環境」についての多くの知識や情報を得ることができました。ただしその内容は決してポジティブなものばかりではなく、むしろ「このままでは持続可能な社会を築くのはムリ」と思わされることの方が多かったかもしれません。



資源
企画広報
立川 尊信

しかし、石田先生をはじめとする講師陣や、同期生他のメンバーと顔を合わせ、ディスカッションをしていると、「ああ、志を同じくする人がいる。頑張っている人がいる」という気持ちになれるのです。この気持ちこそが、人材ユニット2年間で得た、最も大きな成果であると、私は考えています。

今回、第1期生として晴れて修了することができましたが、今後もこの気持ちを持ち続けられるように、いろいろなカタチで人材ユニットに関わっていきたい、と勝手に思っています。

例えば、レジ袋問題への興味がこのユニットに入学するきっかけでしたが、今では環境問題だけではなく、人間社会の様々な問題に興味を抱くようになりました。このユニットでは、「人間の生き方そのものや様々な要素との関係に目を向け、幅広い視点を持って問題に取り組むことの大切さ」を学んだように思えます。そして、問題解決のためには、異なる立場の人々の相互理解や連携が重要であるという確信を持つこともできました。



NPO
森林インストラクター
岩淵 裕子

この2年間、実社会の様々な場所でご活躍している同級生の皆さんと共に、世界最先端のスペシャリストの方々の講義を受け、議論を重ねることができ、本当に貴重な経験をさせていただきました。ここで得た経験を社会に還元することができるように、今後とも努力して参ります。これまでお世話になった皆様に、心より感謝の意を表します。本当にありがとうございました。

親愛なる諸先生方、そして皆様

この機会をお借りして日本においてのこの三年間、お世話になった皆様への感謝の意を述べさせていただきたいと思えます。私は、オサマ・ジュエリ、リビアからの石油エンジニアです。現在私は環境学科の多くの学問分野にまたがる修士課程を終えました。

【学術的経験】

日本で勉強することで最もアピールしたいことは現在到達する最先端の水準の技術を研究できる学術的な環境です。私は日本で最高の大学の一つにいます。また、私は帝国石油株式会社を訪問する機会を持ちました。南長岡ガス田と同様にメインオフィス、そして異なる種類のオイルとガス管理計画および環境に対する影響についての声明に触れられたことは誠に素晴らしい経験でした。ここでの人々との個人的な経験は非常に良かったです。私は私の研究分野で多くの人々に会うことは出来ました。そして彼らは非常に協力的でした。何を望むかについてわかっているならば最も多くの知識をここで得ることが出来ると感じました。

【社会的、文化的経験】

私の故国と比較して文化的、社会的な相違が多数ありますが私の経験は素晴らしいものです。それが私の国と同様に私自身の人生に有益であると確信しています。時々ホームシックであると感じることを除いて、日本での経験は素晴らしいものです。来日した時食事のスタイルは全く異なりました。肉食主義者で特定の制約がありましたが、全体としてそれは対処可能でした。そしてもちろん天気についても忘れることができません。誰もが厳しい冬について私をこわがらせましたが今までのところそんなに厳しい冬を体験しなかったことは幸運だったと思えます。故郷リビアのトリポリで決してありえない雪の日をととても楽しみました。

リビアからの留学生として来日
2007年9月に環境科学専攻修士課程を修了
2007年10月より博士課程に進学

(原文英語で本人が日本語訳、一部省略)



Ausama Giwelli
(松木研究室)



Amna Gumati
(高橋研究室)

I am very pleased to take this opportunity to express myself in this newsletter. Indeed, it's difficult to write a simple paragraph about my Japan experience. Japan is a very interesting place to live in. My time here has been some of the best years of my life. There is so much history to learn and culture to experience. It has been wonderful to be in a culture so entirely different from my own.

Studying in Japan, particularly Tohoku University is a wonderful choice for anybody who wants to learn and get a good knowledge, and who truly wants to experience something different from anything he/she knows at home.

From the first time I visited Tohoku University with my husband, I knew that this was the college I wanted to attend. While I was on the lobby I thought to myself, "I would fit in here, the campus is beautiful, it has a great academic reputation... this is the place where I want to go." I could not find anything that I did not like about the university. To this day I still have no complaints! Ideally, Tohoku was an opportunity that I could not pass up. However, last month, I received a master degree of Interdisciplinary in Environmental Studies, and I am continuing to work towards my PhD degree.

(一部省略)



Hernando Bacosa
(井上研究室)

環境科学研究科の博士前期課程は、私の専門的な知識を改善する大きな機会であったとともに、人として成長する素晴らしい経験でもありました。様々なバックグラウンドを持った教授陣にとっても興味深い学習環境を提供していただきました。授業と研究を通して、関心を明確にして、将来の進路を定めることが出来ました。また、やりがいがあり、興味深い経験をすることができ、環境科学において博士課程に進学するために豊かなバックグラウンドを得ることが出来ました。

連載7

龍は雲に登り 神は崑崙に棲む

—黄河文明の翳—



浅野裕一

国際環境・地域環境学講座
東アジア思想論分野 教授

第三章 儒教における文化の枠組み

儒教は二千年以上にわたって、中国世界の支配的イデオロギーであり続けた。その意味で儒教は、黄河文明の申し子とも言うべき存在である。その儒教は、自然と文明の関係について、どのように思索したのであろうか。それを探るために、まず儒教の原点である孔子の活動を見てみよう。

古代中国の君主(天子)は王号を称したが、各王朝を創始した初代の王のみを特別に尊んで、王者と呼ぶ。それぞれの王朝において、建国者たる王者の言説は、先王の教えとして、二代目以降の王たちが則るべき模範と仰がれた。唐虞氏の王朝を建てた堯(唐堯)や舜(虞舜)、夏王朝を創建した禹、殷王朝を創始した湯、周王朝を樹立した文王・武王などの言説がそれである。またこれら先王の言葉は、王朝の枠を超えて、中国世界の統治階層が準拠すべき為政の指針とも見なされた。

そこで古代先王の発言を記録する『詩経』『書経』は、中国世界の人々が等しくその権威を認める典籍、経典の扱いを受けたのである。そのため臣下が君主を諫めたり、自説を述べて他人を説得しようとする場合、「先王の令に之有りて曰く」(『国語』周語中)とか、「詩に亦た之有りて曰く」(同)と、『詩』や『書』が記す先王の言を引用して、自説を箔付けするのが、当時の知識人の常套手段であった。

このように新王朝を開き、制度を定め、文明を生み出して、天下を太平に治めた実績のある王者の言説こそが、中国世界の人々にとって、権威ある唯一の教えであった。したがって春秋前期(前七七〇~前六四九年)から春秋中期(前六四八~前五二七年)までの時代には、何の政治権力も持たず、天下統治の実績もない一介の民間人の言説を、万人が則るべき教えだと主張するなどといった事態は、全く想像もできないことであった。

ところが春秋後期(前五二六~前四〇四年)になると、思想家個人が門人を集めて学団を形成し、学団内において、師匠の言説が則るべき規範、尊重すべき教えとされる状況が生まれてくる。そうした風潮の先駆となったのは、孔子(前五五二~前四七九年)が魯の都・曲阜に開いた学団であった。

前五三〇年頃、孔子はにわかには礼学の師匠を名乗って、多数の門人を集めた。古代先王は、それぞれ自分が創始した王朝に固有の礼制や音楽を制定したとされる。だがそうした古代の礼楽は、永い時の経過とともに伝承者を失って忘れ去られ、孔子の時代にはほとんど具体的中身が分からない状態であった。だが孔子は、自分だけは夏・殷・周三代の王朝の礼楽に精通しており、不明だった三代の礼制を完璧に復元できたと宣伝した。そこで父兄は、子弟を孔子の学団に入門させて礼楽の知識を学ばせ、その知識によって仕官の道が開けることを期待した。

したがって孔子の学団においても、教えとして学ぶべき対象は、やはり先王の教えであり、先王の礼楽であった。ただしそれは、あくまでも孔子の言説を経由した先王の教えではない。さらに師匠と門人が一つの学団を形成する以上、当然門人たちは、師匠が示す先王の教え以外に、師匠の言説をも自分たちが学ぶべき教えだと考えるようになる。

その結果、先王の教えの上に孔子の個人的教えが乗っかる、二段重ねの構造が出来上がる。つまり伝統的権威を持ち、普遍的価値を認められてきた先王の教えの上に、一介の民間人たる孔子の教えが乗っかり、後者は前者が持つ既成の権威を借りる形で、自己を箔付けする構造が生じたのである。古代先王の教えこそが唯一絶対の教えだとの観念が強固だった時代に、初めて個人によって開設された学団であるから、孔子の学団がそうした二重構造を宿すのは、時代の制約からくる当然の現象であった。

孔子は周王朝の衰退が招いた乱世の無秩序をしきりに慨嘆し、本来在るべき世界秩序の回復を唱え続けた。だがそのために孔子が提示した手段は、自分にだけ復元できたと称する文王・武王・周公旦の時代の礼の制度、つまり周王朝成立時の礼制に復帰せよというに過ぎなかった。そのため孔子教団は礼の制度の学問、礼学を看板に掲げたのだが、そもそも礼学とは何であろうか。

周王朝の朝廷では、定まった期日に、天地や祖先神、山川の神霊を祭る祭祀儀礼が行われた。また天子の即位や葬儀、諸侯や使節の入朝などに関しても、煩瑣な儀礼が執り行われた。人々はこれらの儀礼を唯一の行動規範と仰ぎ、それに厳格にしたがって行動するよう求められた。礼法に服従し続ける限り、人々は自己の主體的な意思や感情のままに、好き勝手に振る舞うことを禁じられ、身分制に基づく一定の様式の下に、常に受け身の言動を取らざるを得なくなる。したがって王朝儀礼の順守は、人々を天子の権威に服従させ、王朝体制を強固に維持する上で、重要な役割を果たす。体制側の人間、保守的な人間が、決まって儀礼の尊重を口にするのは、そのためである。

だが封建された諸侯の力が強大になって、天子の命令に従わなくなれば、彼等は当然、周の王朝儀礼をも無視し始める。特に有力な諸侯は、天子が独占してきた儀礼を自国の朝廷内で勝手に実施して、自らを天子に擬す僭越をくり返す。

このように王朝体制の弱体化と王朝儀礼の衰退とは、表裏一体の現象であるかのように進行する。そこで王朝儀礼をもう一度復活させれば、王朝体制の弱体化も阻止できるとの発想が生じてくる。そのために、失われつつある古代の礼制を復元しようとするのが、礼学と呼ばれる学問である。

もとよりこれは、全くの錯覚でしかない。政治力・経済力・軍事力などの領域で、天子と諸侯の力関係が逆転したところに根本原因があるのであって、王朝儀礼の衰退はそれに付随する二義的現象にすぎない。したがって派生的現象の側を操作する手段によって、根本原因の側を解決できると考えるのは、本末転倒の幻想となる。

だが孔子は、周初の礼制を復元し、それによって身分制度の崩壊を阻止して、世界の安定を取り戻すとの理想を掲げた。それでは周初の礼制復元は可能なのであろうか。五百年も前の文王・武王の時代に、武王の弟の周公旦が制定した周王朝の礼制。その姿を体系的に復元するのは、至難の業である。諸子百家の中で礼学を看板に掲げたのは、孔子教団のみであった。当然孔

子は、礼学の知識を独占できる特殊な立場にあったと考えたくなるが、実はそうではない。周王朝の王朝儀礼は、周の王族や卿・大夫などの高級貴族のように、自ら朝廷の儀式に参列して礼法に習熟している者か、あるいは王室直属の祝官や史官のように、儀式の進行を司る官職にあった者でなければ、その詳細を知ることができない。

特に王朝儀礼に関する体系的かつ具体的知識を保持し、各種の礼法に込められた由緒や意義まで説明できるのは、典礼の記録を代々保存・伝承してきた周王室の史官に限定される。ところが孔子は、周の都・洛陽を遠く離れた魯の片田舎の出で、しかも全く卑賤の生まれであったため、王朝儀礼どころか、諸侯の朝廷や卿・大夫の家で行われていた儀礼さえ、ろくに目撃できない境遇にあった。それにもかかわらず孔子は、魯の都・曲阜でにわか礼学の師匠を名乗って門人を集め、自分は夏・殷・周三代の王朝儀礼について完璧な知識を持っていると豪語したのである。

当然孔子の礼学は、彼がかき集めた一知半解の断片的知識を、自分の想像力でつなぎ合わせただけの、空想の産物でしかなかった。このように孔子の思想活動の出発点そのものが、極めて詐欺的な性格の強いものであった。しかも孔子は、魯に周に代わる新王朝を樹立して自ら王者となり、わが手で復元した周初の礼制を地上に復活させようとする誇大妄想に取つかれる。

孔子はこの狂気を帯びた妄想を引っ提げて諸国を流浪し、各国の君主にその採用を求めたが、どこの君主からも全く相手にされず、もとより実現はしなかった。だが孔子の夢が現実世界に阻まれて挫折したとの怨念は、孔子の後学たちの間に広く浸透し、以後儒教の中に深い陰翳を刻むこととなる

孔子の死後、子貢・子夏・子張・曾参など、七十子と総称される直伝の門人たちは、それぞれに門人を集め、魯や齊・衛・魏などの地域を中心に思想活動を継続する。その際、儒者の意識には、孔子は王者として孔子王朝を創始すべき聖人だったのだと宣伝し、孔子の怨念を晴らさんとする復讐心が強く作用し続けた。そのため彼等は、礼楽に関する古代の伝承を収集・整理したり、不明な部分は空想を交えて捏造したりして、三代の礼楽に関する文献をせっせと書き綴り、それを孔子が門人に伝授する手法を用いて、いかにも孔子が三代の礼制に精通していたかのように見せかけた。現在『礼記』や『大戴礼記』などに収録される諸篇の大半は、こうした偽装工作によって生み出されたものと思われる。(次号へ続く)

NEWS LETTER
2007.11 No.7

GSES



R100

東北大学大学院
環境科学研究科

〒980-8579
宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉6-6-20
TEL (022) 795-7414
FAX (022) 795-4309
<http://www.kankyo.tohoku.ac.jp>

